

琉球大学の招聘をうけて

増田重臣

1. はじめに

1961年10月と1963年4月に琉球大学招聘教授として10週間ずつ渡琉し沖縄を見聞する機会をもつことができた。初回は1年中で一番気候のよい季節であって快適な毎日であったが、今回は例年雨季にあたりうっとおしい日が続くはずであったのに、どうしたものか一滴の雨もなく日本本土から水の救援を得なければならなかった。沖縄に降るべき雨が本土へ降ったのだろうか。雨はなくても気温は高く湿度も80%前後であり、おまけにバスのストや発電機の故障による節電など悪条件が重なった。

通算140日にわたる沖縄生活であるが渡琉の目的が琉大学生に対する集中講義であったし筆者の職業がらを考えて沖縄の教育ならびに土木事情に重点をおいて書いて見ようと思う。しかし土建事業として取り立てていようなものがなかったのであらかじめご了承いただきたい。

2. 沖縄の土建事情

今次の戦禍をうけて古い建築物は破壊されたが城址は各地に残っている。代表的なものとしては首里城・中城・今帰仁城がある。円覚寺の遺蹟も有名であるがいずれもわずかに石垣や石門が残っているのみである。王城としての体面を整えていた首里城は立派なものであったらしい。この城は15世紀初頭に佐敷の尚巴志が築いたといわれ、その後尚真王の治世となったが、その頃が琉球王朝文化の最も栄えた時代であった。香り高い石造美術が隆盛をきわめ各地の城址に見る石門、円覚寺放生池の石橋、今は架け変えられているが石造の真玉橋等が知られている。円覚寺というと尚家菩提寺であるがここに

カット写真：琉球の民家

った石橋は輝石安山岩を使い花鳥・獅子・亀・鹿・蛙・犬等が浮彫されており世界屈指の傑作とされ現在は首里博物館内に復元されている。

築城法はおおむね日本式であり、首里城にある8つの樓門はすべて中国風である。その正門であった守礼の門も復元され現在は琉大入口付近にその偉容をあらわしている。高台にある首里城址から北西を見おろすとひょうたん形の竜潭池がある。ここに船を浮かべ酒宴を張った昔が偲ばれる。もともと低所へつくった池と思われるがそれにしても当時としては大工事であったに相違ない。

さて第二次大戦直後あらゆる保証問題の解決はあともわしにして、米軍がいちはやく島内各所の主要基地を結ぶ道路網を完成させた。当時は本土からも多数の土建業者が応援にでかけたはずである。しかし現在では大きい土木工事はほとんどなく地元業者で間に合っている。設計関係では Pacific Architects & Engineers INC が活躍しており日本人技術者もここで相当数働いている。

琉球政府だけでは大工事を遂行する力がない。ころみに琉球政府予算を見よう。租税収入が総額の68%でこれに米国援助16.1%、日本援助5.1%、その他となっている。1963年度琉球政府予算は本土の類似県の行政水準の約65%に当りはなはだすくない。おまけに沖縄がもし1県であれば当然国家支弁となるべき性質の経費が総額の約1/2を占めている。1950年4月に民政府一般資金が創立せられ営業行為で利益をあげつつ運営されているがプライス法の管理下におかれており、水道公社・電力公社など生活や産業に重要な部門がこの中に入っている点、問題であるようだ。高等弁務官付属機関として琉球開発金融公社があり、市町村の衛生施設や水道施設の改善など公衆衛生の向上に貢献している。たとえば、1963会計年度には13000000ドル融資予定を立てたと聞く。ちょっとした工事をするにしてもこのような融資をうけなければならない。また、民間の方はどうであろうか。

琉球物産の輸出も少しはあるが米軍部隊要員の物資購入役務支出、米人向貸住宅の稼ぐ金、貸地代等に米民間資本も相当動いていると思われる。間口一間のオデンヤに入っても高価な貸ジュークボックスがでんと控えてあるのには驚かされる。

最近の目につく土木工事としては、1963年5月に足掛3年がかりに完成した塩屋橋(ランガー橋)や6月に完成した北部東岸沿いの道路工事、それに現在施工中のガープ川改修工事ぐらいではなからうか。前記2工事の完成記念としてそれぞれ記念切手が売り出された。ガープ川は那覇市内を東西に横ぎり、すぐ海に流れこむドブ川である。幅は10mぐらいであるが高潮時には水はけが悪く強雨があるとはんらんして市内の繁華街はたちまち床

図-1 沖縄本島略図

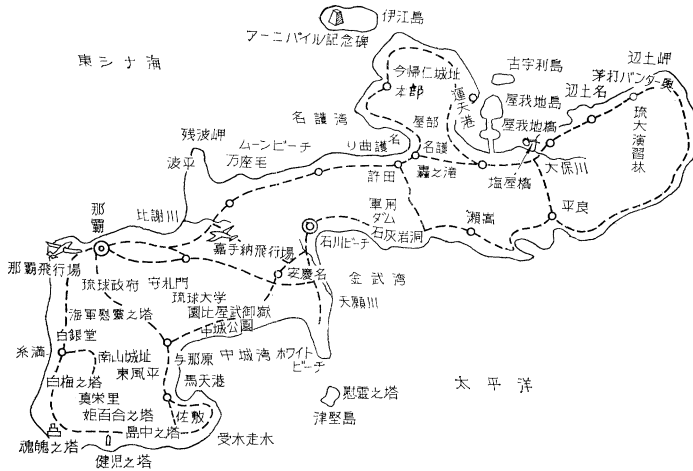


写真-1 塩屋橋

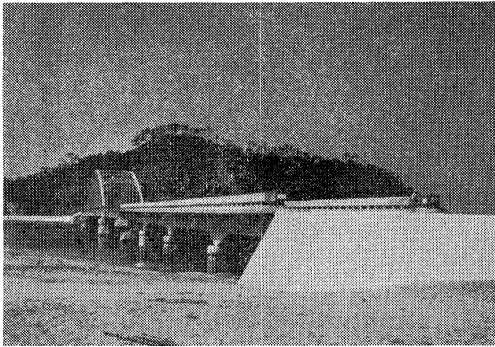


写真-2 ガー川改修工事



上浸水になる。そこでこれを鉄筋コンクリートで暗きょ化しその上へ商店街をつくるという計画のもとに工事が進められている。

さきに述べた軍用道路は舗装もよいが一般の郊外道路は砂塵濛々とし目が開けられない状態である。那覇市内の目貫通りも狭く舗装も悪い。道路はアメリカ式に右側通行で各種のバス、ハイヤー、自家用車が走りまわっている。交通量も増加し車も大型化した昨今では、土質調査を行なった上での近代的な道路設計が要求されてい

る。最近、岐阜市より技術者を招き簡易タール舗装の指導をうけているが那覇市内の狭い道路を対象としているようだ。

建設工事に必要な水や電力はどうであろうか。河川といっても知れたもので、貯水用のダムもあるにはあるが水量に乏しい。那覇市の水は軍需の余りを購入している始末である。島の北部では地下水開発も可能のようであるが中部や南部では濁ったアルカリ性の水しか得られない。南部戦蹟巡りをしてたとき崖下に泉があるのを見た。洗濯する人、水浴する人、頭にのせて水を運ぶ人々がいた。ゴツゴツした岩はだを遠くまで水を運ぶことは大変である。

また電力は一つある火力発電所と米軍の発電船からの余剰電力をうけて那覇市民は一応文化生活を営んでいるが田舎に入ると電気がないところが多い。このように産業開発の立場からみると水や電力の不足はおおいに心配。

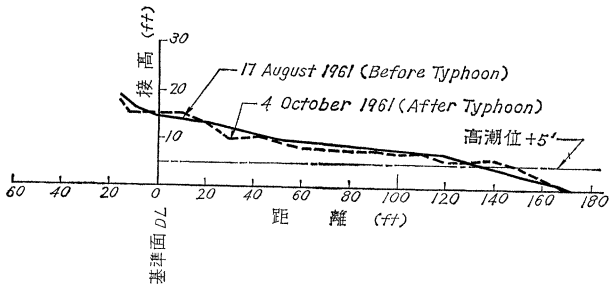
沖縄は毎年台風が悩まされることはご承知のとおりであるが筆者の第2回目の滞琉中(1963年6月18日)台風4号(シャーリー)がやってきた。中心示度945ミリバール、風速50m/sec、進行速度20km/hである。これがまともに来たら大変と恐れをなしていたが幸い石垣島を通過して東支那海に抜けてほっとした。風速40m/secが1時間以上も続くと金武湾内では波高約4mの波がおこると考えられる。

台風のため沖縄本島近海に発生する波は台風が本島に近づくにしたがって周期約16秒、12秒、8秒の波となるようになってこのような波が軍関係の海岸構造物の設計に使用されていると思われる。砂浜も本島各所において海水浴場などに利用されている。図-2に砂浜の実測縦断面の一例を参考までにあげておく。

海岸沿いを走っている広い舗装道路は波をかぶれば交通シャ断はまぬがれないが立派に防潮堤の働きを兼ねている。このように道路のない海岸線は年々崩される部分が多く、コンクリート橋梁が台風通過後にはその前後の取付道路を流失され海中に孤立してしまっているのを見かけた。チリ津波でも異常潮位のため太平洋岸の小学校校舎が山手の方へ移動したり防潮堤が破壊されたり橋梁流失があったそうだ。

強風に耐えるように周囲を石積の屏で固めた民家がよく目につく。多くは珊瑚礁片を乱積したものでハブの棲み家として絶好である。しかし最近ではコンクリートブロック積みに変わりハブの被害も減少している。寄せ棟づくりのわら葺家はあまり見うけられず、しっくい固

図-2 砂浜の縦断面図



めた瓦屋根が多い。門のような構造物はロープをかけ地面に結び倒壊を防ぐ設備が施されている。洩水しても困らぬよう土の壁は使用せず板張り間仕切りであるため屋内はいたって殺風景である。那覇市では住宅不足を緩和するため市営住宅も増築され山地を開拓し宅地の造成も行なわれつつある。

港にはさかんに利用されている那覇港・泊港の他に米軍専用のももあるが、かって栄えた漁港はさびれてしまった。東支那海に面した糸満港もその一つである。ちょうど筆者が沖縄を離れる前日の6月27日にここでハーリーが行なわれた。これは一種の海神祭である。この漁師は捕った魚を妻が買い取り、妻はこれを売りに出るといった変わった風習があったようだ。北部には源為朝上陸地として有名な運天港があるが今は近くの島へ通う小船が浮んでいる。

空港では軍民共用の那覇国際空港のほかに嘉手納飛行場をはじめ軍用飛行場がいくつかある。その他ミサイルホーク基地やナイキ基地も設けられているが、このような基地の増設や老朽施設の改修など軍関係の土木工事は多いであろう。土建業者のもっている施工機械類はほとんど米軍の払下げ品であろう。

土建用材に話題をうつすがわずかに砂と砂利が地元でまかなわれている程度である。砂利は砕石を、砂は海砂を使用している。那覇から糸満へ行く途中の海浜は遠浅で塩田に使用されてきたが今ではここからさかんに砂が採取されている。はるか沖合まで人馬や貨物自動車が行来し砂を運んでいる。鉄筋コンクリート用にもこの砂が使用されてきた。ぼつぼつ海砂使用の被害がでるか不安に思っている人もいる。本土でも河砂不足から海砂使用が考えられているが被害防止も不可能ではなからう。前述のように粗骨材は砕石が使われているが石灰石が多いのでセメント工業の開発が望まれている。

瓦・土管・カメなどの粘土製品は今も大里付近の小工場で生産されている。17世紀頃には古我知焼・知花焼などと呼ばれる有名な南方系の陶器があり、俗に南蛮焼などといわれる素焼も多かった。海岸線を歩いていてしっくい製造用と思われる窯を見たことがある。粘土を固めた窯がぼつねんとと建ち燃料らしい古タイヤが散乱して

いる様子はまことにわびしく感じられた。

3. 沖縄の教育事情

初等教育は1880年(明治13年)に就学率2%であったものが1887年に6.8%, 1897年に36.79%, 1907年には92.81%と普及されていた。しかし中等以上の教育には熱がなく英語を教科からはずそうとした動きもあったという。中等学校の設立はなかなかかどらず専門学校にいたっては男女師範学校を除いて敗戦に至るまでついに1校もできなかった。中等教育の普及率は1932年においてさえ全国平均の約1/2、高等教育は約1割にすぎなかった。この原因は琉球の人達の向学心が低いからではなく本土政府の琉球に対する教育方針によるものようである。その証拠として戦後1961年には小学校227, 中学校163と整備せられ高等学校は普通16, 職業9, その他特殊学校4をはじめ私立の小・中・高等学校もできた。中学卒業者の高校進学率は約50%であり高校卒業者の大学進学率は15%程度である。

義務教育は本土に準じて行なわれ学童たちも黄色い帽子で元気に走りまわっている。中学では沖縄史という特別教科がある以外は教科に変わりがないようだ。しかし本土と同じ教科書を使用するため、教科書では日本円で説明されているのに実際の通貨はドルであるといったような教育上の微妙な悩みが存在している。教科書の無償配布も本土とは少し違っているが校舎不足、施設の不備、学力低下等のなやみは、大きいようである。

教員待遇もやっと本土のそれに近づいてきているとはいえ扶養家族・通勤・暫定などの諸手当もなく政府公務員退職年金法案もお流れになり共済組合制度も固まっていない。公共病院には医者がおらず個人病院は沢山あるが病気になると大変であり、高い医療費に破産して一家心中するという悲劇も生まれる。現在沖縄教職員会があるが組合への移行はまだ実現できない。このほかにも僻地教育・産休手当など問題は山積されている。

つぎに大学には琉球大学をはじめ沖縄大学・国際大学・キリスト教短大の3私立大学がある。沖縄大学は那覇市にあり商・文・法の3学部と初等教育学部があり付属高校や夜間部ももっている。国際大学は中部のコザ市にあり今年短大から昇格し商・文・法系の新制大学である。これも付属高校をもっている。キリスト教短大は首里の琉球大学近くに校舎を新築した。琉球最大の総合大学として琉球大学がある。

琉球大学は米軍の援助のもと1950年4月25日に創立せられ現在では文理・教育・農家政工の3学部26学科をもち学生数2500, 教職員169名, 事務職員203名を数えるまでに成長している。農家政工学部という学部

名は異様に感ずるが農・家政・工いずれも独立して学部を構成するまでにいたっていないのでこのような寄り合い帯名がつけられている。たとえば工学関係は土木・機械・電気の3学科しかない。学生定員は科によって相違するが農工関係では1学級15~35名程度である。このうち土木科がもっとも新しいけれども卒業生は3回出している。

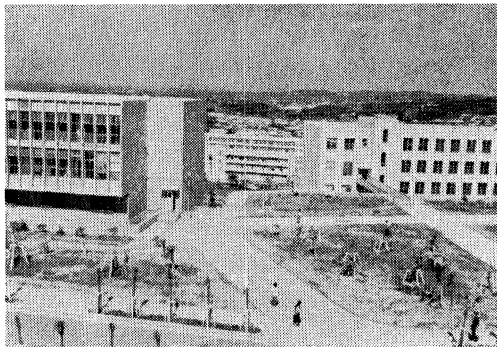
琉大の目的や運営方法が本土のそれと趣きを異にしているので概略の説明を加えよう。

米民政府令による琉球大学の目的はつぎのようである。「琉球大学は琉球の人々に対し一般のおよび専門的知識ならびに教育を普及し、その経済・文化の発展を促進しかつ民主主義諸国を理解しその慣習を学び、自由すなわち言論・集合・請願・信仰および出版の自由を得ることを助長せしめるのを目的とする」とある。

以上の教育方針により琉大は琉球政府から継続的に財政的支持を得ることが保障せられ、同時にまた学問の自

写真—3 琉球大学の一部

(左志喜屋図書館・中央男子寮・右理工学系ビル)



由を守る意味から琉球政府の直接支配を排除するため琉大に法人格が与えられている。琉大の運営は学長が直接行なうが学長は琉球大学理事会により任命せられる。理事は琉球列島米国民政官の認可を得て行政主席により任命せられる。

学長以下の学内構成は本土の新制大学と大同小異であるが専任教官は琉球在籍者に限定せられており特に工学部門の教授・助教授が講師で埋められている現状は少し淋しく思われる。琉球大学ファウンデーションと呼ばれる基人団体が民政府令により並置せられていて広く寄付金をうけこれを運用しアジア財団・ロックフェラー財団などと密接な連けいをとりつつ琉大ならびにその学生の利益のために活躍している。

琉球大学設立の目的からもわかるように研究成果を一般人々に普及する「普及活動」に重点がおかれ米国でもその先進者であるミシガン州立大学と提携し教授を招き進んだ教授法や教育技術を取り入れている。これに要する費用は米陸軍省負担である。このほか高等弁務官府

の管理のもとに琉大の学生や教官等をアメリカの大学や専門学校に留学させたり観察させたりしている。

会計年度は7月から翌年6月末までであるが大学の前期は4~9月、後期は10~翌年3月である。

学生のクラブ活動も盛んで蛇皮線を弾き哀調をおびた琉歌を聞かせてくれたグループもあった。学生総数のおおよそ1/3.5にあたる700名収容できる学生寮があるが付近の民家に下宿している者も多い。寮費は食事付で月8ドルであるが下宿すると20~30ドルくらいらしい。全学生数の約半数が学資に不足しており前記のファウンデーション奨学金、政府教員奨学金や出身市町村からの給付金・奨学金・貸付金などをうけたりアルバイトをしている。

学士の称号を得て卒業し大部分が琉球政府を始めとする諸官庁や米軍関係ならびに会社など琉球内に腰をおちつける。本土へ就職を希望するものもあるが沖縄人に対する認識不足のせいばかりではないが、なかなか思うように就職できないようである。琉大土木科卒業生で本土の地方公務員や民間会社に就職できたものもあるが落ちた者をしらべてみると専門科目は合格しているが教養科目の得点が標準に達していなかった。教養の成績が悪いのはどこに原因があるかわからないしあるいは落ちた本人だけの個人的な問題であるかもしれないが人物難のおりから学生諸君にも大いに頑張っていたいただきたいものである。

4. む す び

沖縄の人々は長い間天災や人災にいためつけられているが絶えず向上への努力を惜んでいない。数多い不利な条件にもまげず人づくりに精を出し産業開発に力を入れ文化水準を高めようとしている。本土の人々は沖縄に対する理解を一層深め、とくに若い卒業生たちの就職に対してご協力賜わるようお願いする。

はなはだまとまりの悪いことになって申しわけなく思うがご了承願いたい。

なお下記資料を参考とした。ここに厚く御礼申し上げます。

参 考 資 料

- 1) 高等弁務官府：莫大な今年度米国の対琉援助，1962年11月特集号
- 2) 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二共著：沖縄，岩波新書 1963年1月
- 3) 沖縄教職員会編：沖縄のすがた，1962年版
- 4) "：沖縄教育 1962年4月13号
- 5) "：沖縄の教育（予算対策資料特集号） 1962年2月
- 6) 琉球大学要覧 1963~1964年
- 7) Pacific Architects & Engineers, INC., Report on Wave Conditions and Associated Refraction Studies., 1961年10月 (1963.12.25・記)

[筆者：正員 工博 岐阜大学教授 工学部]